

中等教育における道德教育としてのクラス会議のあり方について

On homeroom-based student conferences in secondary education for the moral educational purposes

熊谷 圭二郎¹⁾・荻間澤 勇人²⁾

Keijiro KUMAGAI and Hayato KARIMAZAWA

平成27年3月に小中学校の学習指導要領が一部改定され、新たに「特別の教科 道德」が設定された。今回の改定により徳目主義と批判されることがあった道德教育から資質・能力を高める道德教育が求められ、「考える道德」「議論する道德」への転換が期待されている。また、高等学校においては道德教育の中核的な場面として特別活動が挙げられるが、知識伝達に多くの時間を割いてきた高等学校において道德教育が浸透されるとは言い難い。そこで中学校・高等学校の道德教育の一つとしてロングホームルームなどの時間を活用したクラス会議の実施試案を紹介し、中等教育における道德教育の進め方の一つとして提案し、留意点などを指摘した。クラス会議を行う上での課題としてはクラス会議における方法と目的の混同、効果的な話し合いを進める上での学級集団の人間関係の育成や協働性・多様性・主体性の育成が挙げられる。

1. 小・中学校における道德教育

戦後、我が国の学校においては、学校教育全体を通して道德教育が行われた。しかし、十分な成果が見られないとの批判があった。このため昭和33年の教育課程の改訂に当たり、学校教育全体を通じて行う道德教育を補充・深化・統合するための時間として、小・中学校の教育課程における教科外の「道德の時間」が特設された。その後、道德性を計画的かつ発展的に養うことを目指した指導が行われた。

平成27年3月に学習指導要領が一部改正され、道德が「特別の教科」と位置づけられた¹⁾。改正以前の道德教育の課題として中央教育審議会(2014)の答申では「道德教育の要である道德の時間において、その特性を生かした授業が行われていない場合がある」、「発達段階が上がるにつれ、授業に対する児童生徒の受け止めがよくない状況にある」、「学校や教員によって指導の格差が大きい」

ことを指摘している。また、「児童生徒に特定の価値観を押し付けようとするものではないか」という徳目重視の指導に対する批判が指摘されている。さらに「道德の時間」が「各教科等に比べて軽視されがちで、道德教育の要として有効に機能していないことも多く、このことが道德教育全体の停滞につながっている」と指摘されている²⁾。

今回の改正で「特別な教科 道德」と位置づけられ、さらに「考える道德」、「議論する道德」へと転換がはかられたのは、グローバル化や価値観の多様化、科学技術の発展、社会・経済の変化という状況において自ら感じ、考え、他者と協働しながら、よりよい判断ができる児童生徒の道德性の育成が強く望まれているからであろう。新学習指導要領解説においても「道德科は、道德的価値についての単なる知的理解に終始したり、行為の仕方そのものを指導したりする時間ではなく、ねらいとする道德的価値について生徒自身がどのように捉え、どのような葛藤があるのか、また道德的価値を実現することにどのような意味を見出すことができるのかなど、道德的価値を自分との関わりにおいて捉える時間である²⁾」としており、道德実践力を育成する指導方法を求めていることがわかる。

連絡先：熊谷圭二郎 kkumagai@cis.ac.jp

1) 千葉科学大学教職課程

Teacher-Training course, Chiba Institute of Science

2) 会津大学 文化研究センター

Center for Cultural Research and Studies, Aizu University

(2017年10月2日受付, 2017年11月21日受理)

2. 高等学校における道德教育

現行の高等学校学習指導要領(平成21年3月)では、道德教育について「生徒が自己探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達の段階にあることを考慮し人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、その充実を図るものとし、各教科に属する科目、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、適切な指導を行わなければならない³⁾と述べられ、人間としての在り方生き方に関する教育を教育活動全体を通じて行うことが指摘されている。さらに、現行の高等学校学習指導要領解説総則編では「高等学校においては、生徒の発達の段階に対応した指導の工夫が求められることや小・中学校と異なり道德の時間が設けられていないこともあって、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育の指導のための配慮が特に必要である³⁾と指摘されている。つまり、高校には道德の時間が設けられていないが、道德教育が重要かつ必要であることは明らかであり、道德教育を創意工夫して行うことを求めている。

しかし、高校現場では道德教育が漠然としたものになっており、十分になされているとは言い難い。実際、蛭川(2017)は高校現場における道德教育の問題点として「時間が設定されていない」、「学級担任によるホームルーム指導での道德教育に依存」、「実践研究が少なく、イメージがつかめない」、「道德教育に特化して全校で取り組むことはなく、意識の面でも全教職員に浸透し充実しているとはいえない」の4点を挙げており、高校現場において道德教育が行われにくい側面を指摘している⁴⁾。平成26年10月中央教育審議会答申「道德に係る教育課程の改善等について」においても高等学校における道德教育の問題点について「全体としては、高等学校における人としての在り方や生き方に関する中核的な指導の場は、十分には担保されていない」と述べられ、そのうえで「高等学校学習指導要領の次期全面改訂に向けて、社会との関わりの中で主体的に生きる力を育成することをねらいとした新科目の設置に関する検討なども踏まえ、道德教育の改善のための検討を行うことが必要である」と指摘されている。そのため平成29年3月の小・中学校の学習指導要領の改定にもなっており、高等学校学習指導要領においては、道德教育の中核的な場面を特別活動と新設科目の「公共」と「倫理」とする改善・充実の方向が示された。教科として「倫理」だけではなく、新たに必修科目「公共」を創設したという点では、高校における道德教育の重要性、必要性が高まったといえる。しかし、知識の伝達に多くの時間がかけられている「倫理」の授業の現状を踏まえると、小・中学校で求められている「考え、議論する」道德教育と同じような効果を期待するのは難しいと考えられる。

3. 資質・能力を高める道德教育の必要性

近年、教育現場においてキャリア教育が重視され、その関心が高まってきている。平成11年の中央教育審議会では「望ましい職業観・勤労観および職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」であると指摘し⁵⁾、職業観・勤労観の育成が先に挙げられていたが、その後、能力や態度の育成に力点を置く「キャリア発達にかかわる諸能力(4領域8能力)」、「基礎的・汎用的能力」などの子どもたちの資質・能力の育成を重視するようになってきている。

また、昨今、必要性が高まっているアクティブ・ラーニングにおいても次期学習指導要領においても下記のように、これからの時代に求められる資質・能力の育成の必要性が指摘されている。

子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められる

道德教育に関しても次期学習指導要領において「児童生徒の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること」と記されているように、主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を取り入れることが求められ、「考える道徳」、「議論する道徳」への転換が期待されている¹⁾。つまりこれからの初等・中等教育において子どもたちがよりよく生きるために必要な資質・能力の育成が重要課題として挙げられているのである。

さらに、道徳的諸価値の理解に関して学習指導要領解説では「生徒が将来、さまざまな問題場面に出会った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うためには、道徳的価値の意義およびその大切さの理解が必要」と述べた後、次の3つの理解を挙げている。

一つは、内容項目を人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解することである。二つは、道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解することである。三つは、道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということ的前提として理解することである

したがって、道徳教育において求められるのは、よりよく生きていくための資質・能力を育成しながら、ただ一つの方向に子どもたちの考えなどを導くのではなく、「①道徳的価値について自己を見つめながら考え、他者との対話を通して深めていくこと」、「②さまざまな考え方に触れることで物事を広い視野から多面的・多角的に考えていくこと」、さらには「③道徳的価値を考えたり、実施していく上で葛藤や困難が伴うということを学ぶこと」であり、それらを通して道徳性を主体的に育成する必要がある。

4. 道徳教育としての「クラス会議」

以上、述べてきたようにこれからの道徳教育では「考える道徳」「議論する道徳」への転換がはかられ、「対話を通して深めていくこと」、「多面的・多角的に考えていくこと」、「葛藤や困難が伴うということを学ぶこと」が求められている。そこで教科担当教師からの知識伝達が増え、対話を通じた授業が少なくなる傾向が見られる中等教育における道徳教育の一つとしてアドラー心理学で提唱されている「クラス会議」の実施を取り上げたい。

「クラス会議」とは「共同体感覚」を重視するAdler(1978)の理論⁶⁾を背景とした話し合い活動で、「全員にとって現実的かつ実際的な問題を議題として、教師と生徒が一緒になって問題解決や真の対話に取り組むプロセス」⁷⁾である。アドラー心理学では「所属欲求」を人の基本的欲求と考え、最重要概念として「共同体感覚」を挙げている。この「共同体感覚」は「複雑であいまいに定義されている概念」⁸⁾とされるが、会沢(2014)は「他者や世界に対する関心、所属感、貢献感、信頼感・安心感、協力、相互尊敬」の総体だと指摘している⁹⁾。アドラー心理学の知見を生かした教育を提唱しているNelson, Lott,& Glenn(2000)は、共同体感覚は生まれながらにして持っているものではなく、教育や実践等によって身につけていくと述べ、クラス会議は真の共同体感覚を身につけるためのスキルを伸ばすことができ、最短の時間で最も効率よく子どもたちにライフスキルを教える方法だと指摘している⁷⁾。また、クラス会議とは「子どもたちが生活上の問題を議題として出し、クラス全員で解決策を探す」時間¹⁰⁾であり、クラスにおける民主的な話し合いにより「学級を民主的な構造に変え、子どもの学級に対する欲求を満足させ所属感を持たせることが期待できる」¹¹⁾と指摘している。

実際、クラス会議で提出される議題としてはFigure 1のようなものが考えられる。これらはFigure 2の中学校の「特別の教科 道徳」における内容項目のキーワードと比較してみると深い関わりを持つものであるとわかる。例えば「授業に集中できない」、「誘いを断るのが苦手」といった問題は「A 主として自分自身に関すること」

であり、「クラス内の交流を深めたい」、「落ち込んでいる友人にながでできるか」といったものは「B 主として人との関わりに関すること」である。それ以外の「C 主として集団や社会とのかかわりに関すること」、「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」についてもクラス会議のテーマとして挙がる。つまり、クラス会議で話される内容は特別の教科道徳で扱われる内容と同じものであり、しかも生徒にとってはより身近で、切実な問題であるとともに、内容によっては道徳的価値を考えたり、実行したりするうえで葛藤や困難を伴うものだといえる。熊谷(2016)はクラス会議の実施によって共同体感覚の高まりや学級生活満足度の向上を指摘している¹²⁾。

なお、Nelson, Lott,& Glenn(2000)は成功するクラス会議のための6つの法則として以下の点を挙げている⁷⁾。

- ①毎日クラス会議を実施する
- ②輪になって話をする(トーキング・サークル)
- ③結果ではなく、解決に注目する
- ④話し手が持つ小道具(トーキング・ピース)を用意し、輪の中で順々にまわす
- ⑤問題を議題に出した生徒が、自分が有効だと考える解決策を選ぶことを認める
- ⑥教師と生徒がクラス会議のプロセスを学ぶまでトレーニングのための時間を考慮する。

また、クラス会議の進め方については以下のとおりである。

- ①はじめにコンプリメントと感謝の言葉を伝え合う
- ②前回の解決策について検討する
- ③話し合い(議事)を進める
 - a相手の話を聞き、感情を分かち合う。
 - b自由に議論する
 - c問題解決のための手助けを求める
- ④話し合いをもとにこれからの計画を立てる

Figure 1 クラス会議の話し合いのテーマ

<p>クラス会議の話し合いテーマの例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・布団に入ってもなかなか眠れない ・家で宿題をする時間がとれない ・朝起きることができない ・ネットサーフィンがやめられない ・誘いを断ることが苦手 ・授業に集中できない ・クラス内の交流を深めたい ・落ち込んでいる友人になにができるか ・塾に行きたいが親が許してくれない ・親と進路のことでもめている ・行事に対するクラスメンバーの意欲が低い ・教室が汚い ・掃除をサボる人がいる ・学校に来る意欲が低い ・つい間食をしてしまう ・緊張するため人前で話をするのが苦手 ・時間にルーズな人がいる
--

Figure 2 中学校「特別の教科 道徳」における内容項目のキーワード

A 主として自分自身に関する事	自主, 自律, 自由と責任, 節度, 節制, 向上心, 個性の伸長, 希望と勇気, 克己と強い意志, 真理の探求, 創造
B 主として人との関わりに関する事	思いやり, 感謝, 礼儀, 友情, 信頼, 相互理解, 寛容
C 主として集団や社会との関わりに関する事	遵法精神, 公德心, 公正, 公平, 社会正義, 社会参画, 公共の精神, 勤労, 家族愛, 家庭生活の充実, よりよい学校生活, 集団生活の充実, 郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度, 国を愛する態度, 国際理解, 国際貢献
D 主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関する事	生命の尊さ, 自然愛護, 感動, 畏敬の念, よりよく生きる喜び

5. 中等教育におけるクラス会議の実際

クラス会議の進め方として上記の Nelson, Lott, & Glenn (2000) のように全員が輪となり、毎日進めるのが理想的である⁷⁾。しかし、中学校・高等学校のようにホームルームの時間が限られ、しかも今まで行ったことがないク

ラス会議を突然、毎日始めるというのは無理があるだろう。また、中学生や高校生は成長とともに仲の良い人間関係で閉じられていたり、クラス全員の前で話すことに対して抵抗を感じたりすることが多いため上記のように輪になって自分の意見を話すというのは難しいであろう。そこではじめはロングホームルームのような授業においてクラス会議を経験し、クラスに関する問題や個人の問題をクラス全員で対話を通して解決していくという経験を積む必要があるだろう。そこで次に中学校・高等学校におけるクラス会議の進め方について紹介していきたい。なお、生徒がクラス会議に慣れ、その必要性を感じたときは、Nelson, Lott, & Glenn (2000) のように輪になって毎日、短時間でも行うことが望ましいであろう⁷⁾。

1) 話し合いの人数

中学校や高等学校は一般的に40人程度のメンバーがいるため、一人ひとり話をする時間がかかるし、また生徒たちが輪となって話し合うという形態に慣れていないため抵抗を感じるなどの問題点が考えられる。そこではじめからクラス全員で話し合うのではなく、まずは4名から6名程度の人数を一つの班とし、そのメンバー内でテーマについて話し、各自の意見や考えを出し合うことが必要である。その後、クラス全体で話し合う方が各自の考えが反映されやすく、また生徒の主体的な姿勢が期待できる。

2) クラス会議のはじめ

クラス会議のはじめに生徒のクラスメンバーに対するコンプリメントや感謝の言葉を伝えるのはクラス会議をポジティブな雰囲気で行うことや互いの信頼感を高める上で有効である。また、これらの言葉を伝えることで互いに尊重しあっている集団(共同体)を意識させることができる。そこで班ごとの話し合いの前にこのクラスや班メンバーなどに対する良い点や感謝している点を語り合うことが望ましい。しかし、他者に対してコンプリメントや感謝の言葉を与えることに恥ずかしさや抵抗感を感じる生徒がいる場合は、クラス会議内で行うのではなく、熊谷(2016)が実施したように、別のホームルームなどの時間をもって構成的グループエンカウンター¹³⁾を活用して互いの良さを指摘し合ったり、感謝の言葉を伝えるのがいいだろう。特に何を伝えればいいのか浮かばない生徒のためにも構成的グループエンカウンターのようなワークを使うと生徒も比較的抵抗感なく行うことだろう。なお、コンプリメントをはじめに行うことができない場合、教師、または生徒の代表者からクラス会議はよりよいクラスづくり、人間関係づくりをすることが目的であり、そのためにも互いに思っている考えを出し合う場であるということ、意見の食い違いや対立はよりよい集団を作っていくためにおこってしまうことがあると

Figure 3 クラス会議のテーマ（年間）

	クラス会議のテーマ	目的
4月	どのような高校生活を送りたいか	高校に入学してどのような高校生活を送りたいのか、またそのために必要なことは何なのかを話し合う。
5月	現在のクラスについて	クラスが始まって1ヶ月が過ぎ、クラスの良い点・悪い点が目につき始める時期。そこで現在のクラスの課題点を話し合い、共有、および問題解決をはかる。
6月	部活と勉強の文武両道について	部活動では大会なども始まり、活動が本格的になってきた時期。そこで勉強と部活動の両立のために心がけていることや必要なことを話し合う。
7月	夏休みの有効な過ごし方について	高校生活はじめての夏休み。そこでどのように過ごしたいのかを互いに共有し合う。
9月	どのような文化祭にしたいのか	文化祭に向けての問題点や課題を話し合い、クラスをどのような集団にしていきたいのかを話し合う。
10月	クラスの現在の課題点	クラスが始まって半年がすぎ、クラスのことがいろいろ見え始めてきた時期。そこでよりまとまりあるクラスをつくるために、クラスの良い点・悪い点を話し合い、共有、および問題解決をはかる。
11月	何のために学校に来ているのか	当たり前のように来ている学校に対してそれぞれが感じている意味を話し合うことで、自分なりの学校に来る目的を考える。
12月	成績向上のために必要なこと	文武両道を頑張っている生徒もいれば、勉強で苦しんでいる生徒も少なからずいるはず。そこで成績向上のためにそれぞれが取り組んでいることなどを自由に話し合い、今後の学習の進め方の参考にする。
1月	人間関係のトラブル	集団で過ごしているとトラブルや対立は避けることができない。そこで人間関係におけるトラブルの事例を挙げ、当事者ならばどうするかなどについて話し合う。
2月	進路に関する悩み	2年生での選択科目もほぼ決まり、そろそろ高校卒業後の進路についても考える必要がある時期。2年生に上る前に、自分自身の進路や進路を考える上で悩んでいることなどを自由に話し合い、互いの思いを共有し、今後の対応とうについて話し合う。
3月	将来の理想の自分を考える	グローバル化や少子化など変化が激しく、先が見えない社会における生き方・あり方について互いに話し合い、将来どのようになりたいのかを話し合う。

Figure 4 クラス会議の指導案の例

テーマ	「現在のクラスについて」(1年生5月)
ねらい	学校生活にも慣れ始めるとともに、クラスの良い点・悪い点も目に追記始める時期。そこでクラスメンバーそれぞれが感じているクラスの良い点・悪い点を出し合い、よりよいクラスづくりのために必要なことについて意見交換し、その実現に向けて主体的に取り組もうとする意欲や態度を養う。

指導案

		進行	生徒の活動	留意点
導入	5分	○クラス会議の目的を伝える ○今回の話し合いのテーマを伝える	・クラス会議の目的を確認する ・話し合いのテーマを知る	・クラス会議は自分たちの生活上の問題などをテーマとして出し、クラス全体で協力して解決策等を話し合うものだということを伝える。
	15分	○今回のテーマについて各自考えることを紙に書かせる ○4人グループとなり、役割を決め、それぞれが自分の意見を言った後、それについて話し合うように指示を出す	・テーマに関して考えていること・感じていることを紙に書き出す。 ・グループ内で話し合い、自分の役割を決める〈進行、記録、発表、特派員など〉 ・テーマに関してそれぞれの考えを順番に述べた後、それをもとに話し合いを行う	・話し合いの途中で疑問点などがないかを尋ねる。もしあった場合は、クラス全体に対してどうするか考えさせる。
展開	10分	○話し合いで出てきた内容を黒板に書きだすように指示を出す。 ○話し合いで出てきた内容を見て、感じたことや更に話し合いたい問題について意見を出してもらう	・黒板に書かれている話し合いの内容を見て意見共有する ・黒板に書かれた意見を見て感じたことや更に話し合いたい問題について発表する	・各班の意見に対する疑問点などがないかを確認する ・黒板に書かれた意見を見てまずはじめに班で話し合う時間をとるとその後の意見が出やすい
	10分	○問題点の一つを取り上げ、この問題をどのようにして解決したらいいか、意見を出し合う	・更に話し合いたいという意見を取り上げ、クラス全体で話し合いを行う。 ・今後どのようにすればいいのかについて話し合う	・話し合いが終わらない場合は、昼休みや放課後をつかって引き続き行うか、とりあえず次回の検討事項として持ち越すかを確認する。
まとめ	10分	○このクラス会議を振り返って感じたことなどを紙に書くように指示する ○4人グループになって互いに感じたことを伝えるように指示する ○このクラス会議を振り返ってみてクラス全体伝えたい事がある人に発表してもらう ○クラス会議をして教師または司会が感じたことを伝える	・振り返りを記入する ・このクラス会議を通して考えたことをみんな共有する。 ・今後クラスで話し合いたいことなどを紙に書く	・再度、クラス会議の目的を伝え、よりよいクラスづくり、よりよい人間関係を作っていくことの重要性とともに問題解決を進めていく上で葛藤や困難さについても触れておく

いうことをクラス会議のはじめに伝えた方がいいだろう。そして生徒からクラス会議に対する同意を得てから進める方が、その後、主体的な参加が期待できる。

3) 話し合いの進め方

テーマに対して自分の意見がすぐに出てこない生徒も少なくないはずである。そこでクラス会議での話し合いは以下のように進める。①テーマに対する自分自身の意見を考え、それを紙に書く。②各班で一人ずつテーマに関する意見を伝えあう。③互いの意見を参考にしながら議論する。④ある程度の時間が過ぎたら、各班の意見を発表したり、板書したりすることでクラス全体の意見を集約する。⑤全体の意見を見ながらクラス全体でテーマを絞り、それについて話し合う。

なお、生徒同士の話し合いを効果的に進めるためにも班の中で進行や記録、発表などの役割を輪番制で決めておくのがいいだろう。クラス会議の進め方の例として Figure 3 に指導案を載せた。

4) クラス会議のテーマの選定

実際のテーマとして先に挙げた Figure 1 のようなものが考えられるが、生徒たちの主体性を引き出すためにもクラス会議のテーマについてはできる限り生徒から出してもらいたいことが望ましい。テーマについてはクラス全体に関わるものもあれば、個人的なものもあるだろう。その場合、クラス全体の内容についてはクラス全員で話し合い、対応等を考え、個人の問題であれば、その問題をクラス全員で話し合い、その結果を参考にして問題を抱えている個人が最終的に解決策を考えるのがいいだろう。

しかし、実際、生徒からテーマがなかなか出てこないことも考えられる。その際、Figure 4 のようにその時期に問題となりそうなテーマを話し合うのがいいだろう。また、テーマが多くなかなか決まらない場合は、生徒の意識やクラスの状況に基づき、担任が決定するということをあらかじめ生徒に伝えておくのも一つの方法であろう。

なお、クラス会議におけるテーマに関して以下の点を考慮する必要がある。①1時間という限られた時間内で話し合うものにする。(ただし、必要な場合は、他の時間や昼休み、放課後などを活用して話し合う。)②生徒たちの問題意識やニーズに沿ったものを取り上げる。③生徒たちの発達段階や学級の状態などに基づく活動を行う。④心理的ダメージが少ない活動を行う。

5) 振り返りについて

振り返りについてはクラス会議をまとめる意味でも重要である。振り返りをすることで自他の意見をもう一度振り返り、冷静に考えたり、互いがよりよいと思える意見を見出すためにはやはり話し合いが必要だと実感したりすることができる。特にクラスに関する問題などは1回の話し合いで終わらないこともあるため、問題点

を共有し、整理するという意味でも振り返りが必要である。そこで振り返りについては以下のような進め方を行う。①紙を用意し、話し合いで感じたこと、これから行いたいことなどを自由に記入する。②各班で互いの振り返りについて伝え合う。③最後にクラス全体に対して伝えたいことがあったら、発表してもらおう。以上のようにクラス会議を振り返り、互いの感想を共有し合うことはよりよいクラスづくりや互いの成長の足がかりとなるであろう。

なお、議論が途中の場合は一旦、話し合いを止めてここまでの振り返りを行い、今後、この話し合いをどのようにするかを考える必要があるだろう。

6. 短い時間で行うクラス会議

熊谷(2016)はショートホームルームにおいて継続的に15分程度のクラス会議を実施し、その効果を指摘している¹²⁾。クラス会議の実施に慣れておらず、しかもまとまった時間が取れない場合や話し合いにそれほど時間が必要でないとと思われる場合、参考になる進め方だろう。以下のその流れを簡単に紹介する。

- ①テーマが書かれたプリントを配り、各自、考えたことや解決策などを3分弱で記入する(③の時間が確保できないときはこのプリントにコメントを記入する)。
- ②近くの席の4人が机や椅子を動かしグループになる。
- ③コメントとしてクラス内での良かったことなどを一人一言話す。
- ④クラス会議でのテーマについて各自が出し合い、テーマを絞り、解決策等を話し合う。
- ⑤話し合いの結果、感じたことをプリントに記入する。
- ⑥プリントを回収し、次の日の帰りのホームルームで担任が話し合いの内容や感想などを簡単に紹介する。

7. クラス会議の留意点

中学校・高等学校の道徳教育の一つとしてクラス会議の実施を取り上げたが、ここでの目的は、生徒が身近に感じている課題や問題についてクラス全員が互いに話し合い、よりよいと思える解決策や対応を探るというものである。しかし、話し合いがうまく進められないということもあるだろう。そこでクラス会議の留意点を次に挙げる。

1) 人間関係が作れない場合

このような場合、4人組からはじめるのではなく、まずは2人組での話し合いを重ね、自分の意見を伝え合う経験を積み重ねる必要があるだろう。また、クラス会議を行う前にアイスブレイクを行うことで互いの緊張感をとったり、別の時間を使って対人関係ゲームや構成的グループエンカウンターのような人間関係づくりを行った

りすることも効果的であろう。赤坂(2014)はクラス会議で実際の問題解決を話し合う前に、効果的な話し合いに必要な価値やスキル、態度を学ぶエクササイズを4時間実施している¹⁰⁾が、はじめてクラス会議を実施する場合やクラス会議に対する生徒からの抵抗が感じられる場合は、参考にしたい進め方である。また、全員での話し合いが難しいようであれば、クラス会議の意義を知ってもらうためにもまずは少人数の話し合いによってクラスメンバーが感じている問題・課題を共有することから始めることもクラス会議を導入していく上での足がかりとなるだろう。

2) 生徒同士の対立が起こる

クラスの問題を話し合うとグループで対立が起こったり、誰かが悪者となり、責められたりする可能性がある。そのとき、教師はクラス会議の目的を再度伝え、誰かを責めるのではなく、その問題を解決するために互いにどのような協力ができるのかという点を話し合う場だと伝える必要があるだろう。個人の問題であってもそれに対してクラスメンバーが解決策を考えたり、解決のためにクラスメンバーはどのような協力ができるかといったことを話し合うことが大切である。特にクラス会議に関してはどのように進めるかといった「方法」が大切なのではなく、互いに協力し合って課題や問題を解決していこうという「考え方・姿勢」が大切なのだということを教師は生徒に伝える必要がある。

また、話し合いが白熱し、互いの意見をぶつけ合ってしまう場合、相手の意見にしっかり耳を傾けることができず、自分たちの考えに固執してしまっていることもある。そこでトークキング・ピースのような道具を用意し、トークキング・ピースを持っている人だけが話す権利があり、それ以外の人はしっかり話を聞くといったルールを生徒たちに確認させる必要があるだろう。

3) 時間がかかる

クラス会議はときにはとても時間がかかることがある。その場合、昼休みや放課後を利用して話し合うか、とりあえず問題点を共有し、時間をあけて再度話し合ってみるなどクラス全体で話し合うことが必要であろう。まずは解決よりもクラスの問題・課題に対してクラスメンバーが向き合うといった時間を共有することが大切であろう。

4) 参加しない生徒がいる

クラス会議の必要性を感じていない生徒の場合、クラス会議に参加しようという意志・態度は見られないのが普通である。その場合、教師がその生徒の気持ちをしっかり聞くことも大切である。また、これについてクラス全体が問題だと感じているようであれば、それについて話し合うことも必要であろう。いずれにせよ、そのような生徒を無視したり、対応を諦めたりするのではなく、ど

のような対応をするのかということ、教師を始めクラス全体で話し合う必要があるだろう。

以上、クラス会議における留意点を指摘したが、実際、クラス会議を進めていく上で生徒たちと相談しながらクラス会議の進め方を柔軟にアレンジしていき、クラスの実情に合った話し合いができるように工夫していく必要があるだろう。

8. 終わりに

道徳教育の一つとしてクラス会議の実施について述べてきたが、クラス会議がうまく進むまでにはやはり時間がかかるであろう。Johnson, Johnson, Holubec & Roy (1984)はグループの質による成長曲線を紹介し¹⁴⁾、協同学習のはじめは見せかけのグループとなり、成果が低くなるが、グループが成長するにつれて成果も高くなることを指摘している。クラス会議においても同様のことが考えられる。授業で教えるべき内容も増え、クラス全員でクラスや個人の問題を話し合うということが少ない中学校、高等学校でクラス会議のような話し合いを行う場合、そのやり方や必要性がわからないためうまく進まないことが予想される。その際、大切になってくるのは、クラス会議の考え方であり、アクティブ・ラーニングで必要となってくる教師のファシリテーターとしての役割であろう。そこでクラス会議を進める上での課題を以下に挙げる。

まず一つが、クラス会議の目的と方法の混同である。ここで紹介したクラス会議は、クラスメンバーにとってよりよい生活を考えるための会議であり、話し合いの方法である。しかし、道徳教育の目標は道徳性の育成であり、内的資質の育成である。次期学習指導要領でアクティブ・ラーニングが取り上げられたが、手段が目的化するなどの問題点が指摘¹⁵⁾されているが、ここで紹介したクラス会議は道徳性の育成を意識したものであることを忘れてはならない。そこで生徒の道徳性を育成するためにどのような内容をどのように進めていくのかといった実践の蓄積が必要である。また、教科としての道徳の中で行う場合、その評価をどのようにするかといったことを検討していく必要がある。

二つ目は、学級集団の人間関係の質の問題である。道徳科において主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を行うためには自分が感じたこと、考えたことを自由に語り合う必要がある。そのためには、そのようなことを言ってもばかにされたり、否定されたりしない人間関係が必要である。そこで道徳教育を充実させるためには、安心安全を感じられるだけの学級集団の人間関係づくりが必要不可欠であり、クラス会議を通してどのように人間関係の質を高めていくかを考える必要がある。

三つ目は児童生徒の協働性、多様性、主体性の意識をどのように育成していくかといことである。グループ活動を活用することが多いアクティブ・ラーニングでは協働性や主体性の欠如による「フリーライダー(他者の意見にただ乗りする者)」や「イージーライダー(手抜きする者)」, 参加しようとしなない者などの問題が指摘されている¹⁶⁾。クラス会議の手法を取り入れ、形式的に進めるだけでは生徒の協働性、多様性、主体性の意識は育たず、逆に表面的な対話やかかわりで終わる可能性が高い。学校においてどのようにして生徒の協働性、多様性、主体性の意識を育成していくかこれからしっかり検討していく必要がある。

- 13) 國分康孝 1981 エンカウンター—心とこころのふれあい 誠信書房
- 14) Jonson, D. W., Johnson, R. T., Houlbec, E. J., Roy, P. 1984. Circles of learning.: Cooperation in the classroom. Alexandria, VA : Association for Supervision and Curriculum Development.. (石田裕久・梅原巳代子訳 2010. 学習の輪—学び合いの協同学習入門 二瓶社
- 15) 柴原弘志 2016 道德教育におけるアクティブ・ラーニングとは何か 道德教育, 695, 9-11.
- 16) Barkley, E. F., Cross, K. P. & Major, C. H. 2005 Collaborative Learning techniques. John Willy & Sons. (安永悟 監訳 2009 協同学習の技法 ナカニシヤ出版)

引用文献

- 1) 文部科学省 2015 学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編
- 2) 中央教育審議会 2014 道德に係る教育課程の改善等について(答申)
- 3) 文部科学省 2009 高等学校学習指導要領解説 総則編
- 4) 蛭川喜信 2017 高等学校における道德教育のあり方に関する研究: 高校生にとっての道德規範意識と教員の道德教育観 東邦学誌, 46 (1), 127-139.
- 5) 中央教育審議会 1999 初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)
- 6) Adler, A. 1978 The Education of Children, Trans. By Eleanore and Friedrich Jensen, Indiana, Gateway. (岸見一郎(訳) 1998 子どもの教育 一光社)
- 7) Nelson, J. J. , Lott, L. and Glenn, H. S. 2000 Positive Discipline in the Classroom, Roseville, Prima Publishing. (会沢信彦訳 2000 クラス会議で子どもが変わる コスモス・ライブラリー)
- 8) 高坂康雅 2011 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究, 59, 88-99.
- 9) 会沢信彦 2014 学級づくりに生かす共同体感覚 会沢信人・岩井俊憲 編 今日から始める学級担任のためのアドラー心理学 —勇気づけで共同体感覚を育てる 図書文化社, 118-127.
- 10) 赤坂信二 2014 赤坂版「クラス会議」完全マニュアル 人とつながって生きる子どもを育てる ほんの森出版
- 11) 赤坂信二・水落芳明・桐生徹・神崎弘範 2012 学級の話し合い活動における今日的課題 上越教育大学研究紀要, 31, 1-6.
- 12) 熊谷圭二郎 2016 高校生に対する短時間で継続的なクラス会議とグループワークの実践研究 学級経営心理学研究, 5 (1), 65-74.